女學雜誌

版權所有

各土曜日出版

第百七拾貳號

當府內無郵税

一冊六錢

Digitized by Google

Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 172. July 28th, 1889.

第百七十二號目錄

EDITORIAL:—Consecration. IV. (Concluded).

LEADING ARTICLE:— Improvement of Food IV.

CRITICAL NOTES:—Karamatsu-Misao.

MISCELLANEOUS: — John Hampden. Queen Elithabeth. Men Judged by Women. Thou shalt wash one another's feet. Literal Inspiration and Manufacture.

DROLLERY.

CHILDREN'S COLUMN.

BIOGRAPHIES.

NOVELS.

GENERAL NEWS.

社說　犧牲獻身
論說　食物改良論(津田仙、巖本善治)
批評　南翠外史の「唐松操」(南仙子)
雜錄　輕々しく劔を拔かず○女流政治家○汝曹宜しく互に足を洗ふべし○新婦、花郎に送る○男子を見る女性の眼孔○歸鄉歎○詩を描くなかれ○茶話三
見鑑　小島の話し(さなへ)
史傳　啓敏孫漂流記(ふ、ち)
小說　眞才子(麻溪居士)
寄書　得意と失意(秋香小史)
新報　賄賂事件中の確定罪○現今社交上の天女○各地青年の運動○現時最有益なる女學運動○ペルッ氏の女子教育論○少なくとも同伴せよ○君何んぞ怒らざる○山林は甚はだ公平なり○婦人矯風會○福島人物評○改革事業さ儉素の風習○日本改革者閨てる孃
片々　御歌の事○男女婚姻年齡取調委員○外七件

WOMEN IN JAPAN.

(1) *It is proposed to erect a bronze statue in front of the palace gate, and a reward of fifty yen has been offered for the best plan.*

(2) *Among the revised prison laws is that of allowing the women to nurse their children until they are three years old.*

(3) *The Kwazoku Jo-gakko conferred certificates on its first class of graduates on the 18th instant, at the same time celebrating the opening of the new building took place. H. I. M. the Empress honoured the occasion with her presence.*

(4) *The Ferris Seminary of Yokohama graduated Miss Mine Hasegawa from the Academic cours together with four from the Grammar. The Meiji Jo-Gakko graduated Miss Shige Hisano from the regular and seven from the Japanese course.*

(5) *The Presbyterian Mission has lately completed a commodious building for the education of girl in Sendai. The Rev. K. Ibuka and Rev. M. Uemura went down from Tokyo to assist in the dedicatory ceremony.*

Digitized by Google

Original from COLUMBIA UNIVERSITY

女學雜誌 第百七十二號

明治二十二年七月廿七日發兌

社説

○犠牲獻身

八 眞正のホームを論ず

第一 日本の家族、西洋のホーム

日本人が家族を見ると猶ほ役所に於ける如く、西洋人がホームを見ると恰かも温泉場に於けるに似たり、一は上下を着て應接するが如きを以て立派なるものとし、一は安樂椅子に寄りて自由に談話するが如きを以て完全なるものとせり。諺に云く兄弟は他人の初めなりと、然らば啻に兄弟のみならず、彼の兄弟の妻と子とを以て、更に兄弟の妻子の兄弟を以て、更に又老翁老媼を以て、混合せられたる日本の家族は、既に是れ他人及び他人の他人を以つて組織せらるゝものにあらずや、此に於て安くんぞ和遠慮し、心配し、苦勞し、掛念し、忍耐し、辛棒することを要せざるあらんや、其上等なるものは百忍を守りて粛々焉として謹しみ、其の下等なるものは猜忌反目して相爭ふことを止めず、甚だ能く調和したりと云へるゝは老母が親切に老父に屈服し、息子媳が丁寧に老父母に屈服し、新夫婦が萬事小姑舅に一目を置くの家にあり、即ち治者嚴として君臨し、被治者順として臣事し、先入者肩を聳かして威張り、後入者腰を屈めて從順し、父子兄弟夫婦各自に役目を守りて、一小家族中に一大邦國を形どり、茲に憲法なく定文律なき一種の專制政府を設置するに至りて、初めて能く日本家族の望む所ろに達したりと云ふべし。然るに西洋人が其家族に對するの考は大いに之に異なり、寧しろ一夫一婦を以て一家族の必要素となし、成るべく此の兩分子のみを以て一箇のホームを化成せんことを欲するあり、故に彼等が婚するや直ちにホネームーンとか謂へる出遊を試みて、新夫婦二人氣儘に父母の家を離る、月落ちすでに歸省の時期となれば直ちに新居宅を搆へて復た父母と同居せず、彼等が産は或は貧しくして破碗片盆に過ぎざることもあるべし、然れども其の造りたる半汁の羹は之を兩人の外に分つことを要せず、父母在來の家具珍寶を讓られざる代りには、亦其新調の道具二組の外に入用する所あらず、家內の規則未だ定らざる代りには先祖代々の舊習慣を墨守すべき心配もなし、惣べて是創造的に試みて只彼等が思ふまゝに取計らふ也、故に其氣樂なること言はん方なく、心配なきこと殆んど人界の外にある心地すらん。

然りと云へども日本の家族は總べて彼が如し、西洋の家族は總べて此の如しと云ふ者あらば吾人亦た其の暴斷を笑はん、只だ夫れ日本人が其家族に於ける考の西洋人が其ホームに於けるの考に相異なる處ろあるや大率ね如此けん、吾人則ち之を擧げて此れ日本の家族及び西洋のホームの相ひ違ふ所也と云はゝ或は庶幾からんか、故に日本に於ては家族に窮屈あることを常とし、西洋に於てはホームに氣樂あることを常とす、日本人は家族に於て辛棒することに慣れ、西洋人はホームに於て樂をすることに慣る、左れば其の一は勤務的也、他は娯樂的也、一は犧牲的也、他は求福的也。

第二　西洋人日本人ともに誤まれり

家族に對する日本人及西洋人の考ふる所ろ如此く相違せり、故に若し日本人の考にして正當あらば西洋人の考ふる所ろ誤まりにてあらざる可らず、若又西洋人の考にして正當あらば日本人の考ふる所ろ誤まりにてあらざる可らず、凡そ吾人が家族に對するの考もし其一に居らば即はち吾人が家族に對するの誤見亦た或は其一にあるべし、抑そも何れか正しく何れか誤まれるや、吾人思へらく此れ共に誤まれり。

日本人は其の一小家族を以て恰かも一個の大邦國の如く見做せり、父母君臨し、夫婦昆弟臣事せるを以て最上乘の立派なる家族の如く見做せり、之れ或は可也、然れども國を家より成るとせば、家も亦た國の如くあらざる可らず。故に若し一家にして專擅政の行はるべくんば其國も亦た專制政府を安置するに足るべしと雖ども既に若し一國最早專制政府を置くに堪へざるの文明に進みて、而して一家尚ほ此の文明に伴ふ能はずんば抑そも立國の安全を如何んせんや。吾人は君主が濫りに民の自由權を奪ふ能はざることを確知せり、政府が濫りに民の言論を抑制すること能はざるを確知せり、天皇尚ほ不善を爲す能はず、一國尚ほ憲法の外に動く能はざることを確知せり、而して豈に一家に於てのみ中古舊幕の餘弊を永存すべき理あらんや。彼の兄弟相ひ愛すべきことは何れの敎に於ても敎へられ、夫婦相ひ愛すべしとの敎へも亦た何れの敎に於ても敎へられ、夫婦昆弟よく其父母に仕ふべしとの敎へも亦た何れの敎へに於ても敎へられたり、忠孝仁愛の義務は人間の總べて負ひ總べて行はざる可らざるもの也、然れども人は其忠孝仁愛を行はざる可らざるを以て必らず人の爲に屈服せしめらるべき者にあらず、彼は自由にして初めて道を實行し、自由にして初めて道德を實行し、自由にして初めて人間の至情を盡す

とを得べし、之を壓制し、束縛し、抑限して以て之を立派なる人間たらしめんと欲す、大いある誤謬に非ずや。故に吾人は日本の家族を以て人爲的、製造的ありと信ず、之を自然の人情に隨へるものと信ずる能はず、其の時に立派に見ゆる所ろのものあるは、只だ捏造せられたる植木の如き美觀あるに由る、未だ萬樹春に會して亭々矗々伸立し長立したるの壯觀あるに由と爲さゞる也。日本の家族すでに正當にあらず、然れども西洋の家族亦た決して誤まりなきものに非ず。

第三　新日本の家族

然るに近く二三年來に至りて西洋のホームなるもの大いに日本人に愛せられ、未だ英語を知らざるものも既にスヰート、ホームなる外國語の和樂圓滿なる家族の義なるとを悟了するに至れり。吾人が前年大いに「日本の家族」を非難したる當時に在りては未だ如此くあらざりし、然れども今や日本の家制を不滿足として、只管らに西洋のホームを慕ふもの甚はだ多なれり、之れ或は一の喜こぶべき變遷にてやあらん、然れども如此き人は未だ西洋人がホームに於ける意見の均しく亦た誤まり居るとを知らざる也。

素より吾人は大膽に惣べての西洋人と惣稱するとを爲さず、然れども最大多數の西洋人は大抵皆なホームに付て誤見を懷く、特に此の誤見を誤見ありと知了せずして萬事之に模倣せんとするの日本人に至りては、思ふに皆な滔々として此の大誤謬に落入らざるものあらざる也。

即はち云く、家族は樂しきもの也、ホームはスヰートなるもの也、スヰート、ホームは正に是れ荊棘なくして薔薇つねに咲ひ、玉露滑らかに潤ほひて土塵曾て起らず、香氣馥郁し、愛鳥歌ひ、蝶ひるがへり、虫吟ずるの地なり、世上は惣べて茫々たる砂漠なり、家は此れ緑々たる草地なり、世上は炎々たる烈火の地獄なり、家は淸音玲瓏たる天國なり、失樂園の罰滿地に充つるとも、パラダイスの殘花常しなへに此に咲き、天使鳩の如く此處ろに直下し來りて自由に天樂を贊美す、家は即はち幸福圓滿し、和樂十分し、人生の至幸此に於て至盡する者なりと。故に彼等はホームは必らずスヰートにてあるべく、家族は常に幸福にてあるべしと信ず、左れば初めよりホームとスヰートチスを以て斷離しがたきものとし、家族と幸福とを以て相別れがたきものとし、其の初めて家族を造りてホームに入るや、正に幸福を以つて望みとす、花聟は幸わひならんとして妻を娶り、花婦は喜ばんとして父母を離な

三

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

れ、朋友は友人の幸福ならんとを望みて之を祝し、牧師は新夫婦の幸福ならんとを信じて神に感謝す、思に皆な大いなる誤まり也。

第四　幸　福

文明の進步は總べての者を發見し盡さんと爲す、隱れたる蒸滊力も出で來り、密そみたる電氣力も現はれ來り、未だ在らざりし新器械、新工夫、新世界、新議論續々として發明せられ來る也、而して未だ嘗て幸福を覔めて幸福を見出し盡したるものあらざるは如何ん。

古來球上に生成したる人類抑そも幾千ぞや、彼等は呱々として泣ける初めより棺に入るの終に至る迄で幸福を求めたり、而して彼等果して何程の幸福を得たりや、幸福は食物にありと思ひたり、即ち食料を以て滿腹したり然れども彼は之を以て心を滿たす能はず、幸福は名にありと思ひたり、則はち名を求めて一世を聳動したり然れども其聲名は遂に藁一束に過ぎざりし、幸福は山にありと思ひたり、則はち山に入りて仙人となれり然れども木食未だ厭かず葉衣尙ほ新らしきとき彼既に寂寥に泣けり、幸福は權勢にありと思へり、則はち兵を擧て天下を席卷したり然れども天下漸やく治まるとき衷心初めて亂れ來れり、嗚呼古來何人か幸福を覔めて幸福を得たる、幸福を覔めて未だ幸福を得ざるときに當ては彼他日幸福を得べしと信じたり、而して彼既に幸福を得たりと思ふの時乃はちすでに幸福を失ひたるとを覺悟すべし、幸福は虹の如し、蜃氣樓の如し、風の如し。

見よ人世の目的は何の點にありや、果して幸福にありとするか、果して幸福にありとせば、疾病何の爲に存する、毒蛇何の爲に存する、死何の爲に存する、抑そも天に上帝在まし、世に大能を現じ、人世を一個の大幸福に進ましめんとを欲して而して尙ほ如此き不幸を存せしめざる可らざるか、左らば上帝の大能力實に疑はざる可らず、苟くも人世の目的初めより幸福にあり、人間の目的初めより幸福にあらば、世上人類の景況決して今の如くあるべからざる也。みどり兒は父母を喜ばせ來り乍ちにして死し、金殿玉樓は峩々として出來し乍ちにして火け、婚儀は祝すべく畢り今夕頓かに花郞死し、才子學成りて忽焉として沒滅するもの抑ろも何の爲めぞ、若し幸福の多からんを欲せば、アダム、エバは何の爲に樂園を失なひ、生理學健全學は何の爲に初めより完全せず、人類異志を懷だき何の爲めに相ひ戰ふとを爲す、嗚呼もし幸福を以て

人世の終極目的とせば、吾人が理性は彼の一草一木をも解釋する能わざる也。

人世すでに必らずしも幸福を望む可らず、人間すでに亦た幸福を求め得がたしとせば、家族に於てのみ何んすれぞ獨り幸福を必望し得べけんや、よし之を望むとは敢てするを得べしと雖ども、若し如此き空望を懐きて家族を新創するものあらば、其人や實に憫れむべし、ハチームーン未だ畢らざるとき、既に絶望の苦惱あらんとす。

第五　善を爲す尤も樂し

吾人は思ふ人間の目的は善を爲すにあり、人世の目的は善を増進するにあり、若し夫れ善を爲すことを以て第一とせば、彼の不幸疾病凶變のある處ろ之れ善を養ひ善を行ふの處ろたるを知るべし、古人云く朝たに道を聞かば夕べに死すとも可也と、蓋し死の苦しきは道を聞くの樂しきに及ばず、況んや道を行ふの樂しきに至りては萬の死ありと云へども尚ほ及ばざる也、人請ふ眼を擧て世上を見よ、何んぞ善を爲すの處ろ充滿して、利を得るの處ろ、樂しみを受るの所ろ欠乏せるや、更らに心を潜めて自から衷心に顧みよ、吾が念ひ何んぞ善を爲すに安んじて、利を貪ぼり、樂しみに慾するに安んぜざるの明らかなる、吾人が眞性は犧牲を樂しみ、身を獻じて何事かの善を爲さんと欲す、吾人が最奥の祈禱は、富まんことにあらず、貴とからんことにあらず、只だ善にして善を行ふに堪へんと也、果して然らば人何を以て人世の實相必らず此の極目的に達するにあることを疑ふや。

然りと云へども人は只だ苦しめらるゝが爲に苦しめらるゝものにあらず、又幸福を與へられまじきが爲に幸福を與へられざるにあらず、寧ろ天は人をして大に樂しましめんことを欲す、故に之を苦しむ、人をして大に幸福ならしめんことを欲す、故に之をして先づ幸福を求めしめざる也。抑そも眞正の快樂は苦を經てのち初めて發揮し、眞正の幸福は、善を爲したるの后に於て初めて十分す、故に人もし先づ苦しまば則ち遂に快樂を得べし、もし先づ善を望まば遂に幸福を受くるを得べし。快樂幸福は决果にして元因にあらず、目的にあらずして常に其の報賞にてあるべし。世人よ世人よ汝等多くの事によりて思ひ煩らふ、左れど無かるまじきものは唯一つ也、請ふ先づ善の國と其の正しきを求めよ、然らば殘りのものは皆な之に加へらるべし。

此に至りて吾人初めて人世の目的を知り、人間の安んずる所

ろを知り、家族の當に正當の理想と爲すべき所ろのものを知る也。

第六　家族眞正の祈禱

天高く地厚し、列國四方に割據し、蒼生億兆を以て算ふ、中に就き吾人は斯國に於て斯時に生れ、斯の家族と合す、仰げば天に日月あり昭々として照る、俯して思ふときは良心明々として存す、吾人が家族と共に、此時代、此邦土の爲に盡さゞる可らざるの義務甚大なるを覺ゆ、萬象流轉して定まりなく、榮枯盛衰浮雲の如し、然れども吾人が生命は望み悠遠にして甚はだ長し、只だ肉に飽き、名に溺れ、權勢に醉ふて滿足すること能わざる也、願くは眞知いよ〳〵發達し、天地の美妙ますます瞭解せられ、吾人が善に樂しみ義に勇さむの仁心大いに成長せんことを。抑そも吾人固より幸福を望まず、安くんぞ吾等が家族に對してのみ幸福を求めんや、若し吾人が父母妻子昆弟と信愛すること人情の至極に達し、共に疑ふことなくして相ひ善を爲すに勉むることを得ば、吾人がホームに要むる所ろ既に得たり、而して如此にして初めて眞正の幸福あるを得べしと信ず。吾人は終始永久に人間たらんことを期す、則はち能く獨立し、高きに進み、善に與みし、仁に行はんと欲す、故に父母に仕へては孝、昆弟に交りては忠、妻に對しては愛、子に對しては慈ならんことを望む、如此にして吾人常に自己を確守し而して能く樂しんで犧牲獻身し、先づ一家の爲に一身を棄て、遂に之を一國に及ぼさんことを欲す、吾人は父母を崇拜するにあらず、昆弟に迷信するにあらず、妻子に惑溺するにあらず、獨り吾人が至性如此あらずんば決して滿足せざるに由る也、吾人豈に家族其自身を以て他の事物に異なれりとせんや、吾人が之を見るに重きは只だ其の吾人に尤も近く、尤も關係切なるに由る、吾人個々先づ尤も近く尤も切なる處に於て尤も多く勉めずんば夫れ他の遠大を如何んせんや。

左れば若し新たに婚して新に家族を創造せんとするものあらば、請ふ先づ天に祈りて深く期せよ、願くは妻を愛すること己れが如くなることを得んと、抑も弱性を平等視し、異性を同等視し、別人を同胞視するは既に吾が大いなる善なれば也。願くは妻を信ずること己が如くなることを得んと、抑も他の欠點を承知して亦た其美質を確認し、自己の安危を忘て他の最長所に委信するは、既に吾が大なる德なれば也。願くは妻と共に志を同ふして、國に報ひ人類の爲に盡し、相ひ助け危きに救て善業に勉ることを得んと、抑そも彼此相奬勵して共に犧牲に走る、既に

吾が大いなる進歩なれば也。祈るらくは吾人をして啻だ幸福に求め、安樂に安んじ、戀愛に溺れ、優柔として特り和睦せる男女たらしむる勿れ、若し道に適せば今日家を擕ふ明朝すでに死するも可也、吾人をして幸福の爲に至からしむる勿れ、寧ろ正しきとの爲に碎けしめよ、身を獻じて犧牲となるは即はち吾人が望を成就したるの時なれば也。（大尾）

論說

○食物改良論

津田仙　磯木蓮治　同著

第四章　日本の食物

菜根を食ふて百事成すべしと云ふ者あり此れ漢儒至極の愚論にして爲に東洋開化の進步を妨げたると尠しとせず凡そ諺語は自明の眞理同樣の効力あるものなるが故に其暗々裏に人心を制すると甚だ大なり吾人は彼の氏より育の喩諺ありて日本人種の發達を妨げたること亦た實に多かるべしと思へり。

世の未だ開化せざるときは大凡そ肉食の盛なるを以て各國の常例とせり然るに我が國の如きは孝德帝の二年（紀元千三百六年）既に百姓の肉を食ふを禁じ天武帝の四年（紀元千三百卅六年）禁肉の令を制して牛馬犬雞の肉に限り嵯峨帝の弘仁二年（紀元千七百七十三年）更に此の禁制の實施を嚴にしたり此等の令は固より佛敎流行の因縁に起るものと雖も抑も亦た民をして徒らに節儉せしめ土階三等茅茨剪らざる粗風の行れんとを欲して所云る菜根を食ふて初て百事成すべしとの主義を主張したるが故に由るなり。

斯くの如くして此の風敎近代に至る迄で流行し來り彼の徳川治世三百年の太平空氣中に發達したる日本の文明も尚ほ此の誤謬を破壞する能はずいよいよ勉勞するものは即ちいよいよ粗食すべき習慣となりて粗食は一に勉勞を代表するの意義となりたり故に彼の尤も多く刻苦勉勞したる農夫等が社會中に於て尤も甚しく粗食したるとは固より幕府施政の勢之をして止を得ざるに至らしめたるものと雖も施政をして遂に斯くの如くならしめたるもの、何なるやを問へば即ち之をして粗食せしめずんば彼決して勉勞せざるべしとの妄想之が元因たりしならん而して美食飽飲し得べきものは當時皆な上流の士族にして平常遊息緩漫として一線の筋力をも要せざる所の者なりしが故に其好む所は勢ひ躰要に適して身躰を發達せしむべき多滋養の品なる能はず反つてたゞ其の口慾に應ずべき品なりしを以て當時に所云る食の美なるものとは即ちたゞ淡泊輕

素の食物を意味するとゝなりたり貝原養生訓には日本人は生れつき薄弱にして腸胃弱く食少くして牛馬犬羊の肉を食ふに宜しからず輕き物を食ふに宜しと云へり養生の談を爲す者にして所論如此し當時に滋養食の行はれざりしも亦宜べなりと云ふべし維新以來開化の性質稍や一變したるが如しと雖も此二點の弊風は今に至りて尙ほ全く滅するとを得ず五六年來衛生の議論甚だ隆盛となりて心ある者は初めてよく身躰の活物たる所以を承知したるが如しと雖も然れども尙ほ菜根主義を守りて子弟を敎育するの人少からず曰く某學士は豆腐の糟を食ひて大儒となりたり曰く某學士は煎豆を噛んでよく大成したりと然れども書生の肺病、腦痛、胃病を初めとして凡百の書生病大抵は其の粗食に關係せざるなきを知らず又尙ほ粗食主義を守りて勞力者を箝制せんとするもの少からず曰く農夫は食に奢る可らず節儉第一なり曰く農夫は近來身の程を忘れて此不景氣を惹起したりと然ども日本農業の振起せざる日本農民の發達せざるは一に其美食美處せずして舊地位に安んずるの故に因らざるなきを知らざる也故に凡そ今の改革者たらんものは先づ勤めて斯の如き弊風を破壞し去らざる可らず。

凡そ人の眞正に需要すべき食物は時と所と人とに隨て相差ふべきは勿論なり南米のグエコス人が特に生肉質を要し北海のエスキモー人が多く發溫質を要する如き相違は所々之あるべしと雖も假りに其大平均を取りて今日に所云る好發達の人類一人の要すべき食物如何を撿せんが爲めに彼の英、佛、獨、墺の四大國に於て適當の運動を爲すべき健康の兵卒に給する毎日の平均食量を聞くに、

蛋白質	三五、一一
澱粉及糖	一五五、六八八
脂肪	一一、六三七
無機質	五、九四八
合計	二〇八、三八四

大抵右表の如しと云へり。

今先づ蛋白質の一點に就て考案し米を食つて右表に揭示する所の分量を收得すると爲さばパンチ氏の日本農業化學に據り玄米諸分析の平均を取て百匁に付六匁餘の蛋白質あるとと略定するときは三十五匁の蛋白質を供すべきものは凡そ五百八十匁ならざる可らず然るに五百八十匁の玄米は大略一升四合半にして(玄米一升を四百匁と積りて)一割減の白米と爲したりとも尙ほ大抵一升三合なるが故にかの兵卒の日々に受要す

ると同量の蛋白質を得んと欲せば毎日白米一升三合を食はざるべからず今日普通の定則を越へて大食し日に六合を食ひたりとするも尚ほ該兵卒の要すべき滋養分の半ばをも受る能はざるなり。

然るに實際に於て白米を食ふものは彼の尤も多く勉勞する農夫社會中に於て特に尤も少し不消化なる黍、粟、稗、（黍、粟、稗は元來米に優るの滋養分を存すると雖も現今調理の方を得ざるが故に甚だ不消化にして隨て養少し此等の調理方亦た改良せざる可らず）を混食し芋、菜類を以て腹を塡め漸く其饑餓を防ぐと恰も餓鬼が水を飲みて一時の苦を忍ぶに似たり吾人思ふて玆に至れば長大息に禁へざる也。

又やゝ養食し得べき上流社會の人と雖も亦た彼の淡泊主義を賞用して實際に滋養を得ると均しく多しとなさず其一證として此の社會の飲食する會席料理なるものを見て之を知るべし一言すれば彼等は滋養物の滋養液素を流し去りて其粕を食ふものなり曰く此れ風味佳なり曰く此淡泊なりと如此き食物決して人身を養ふに足らざる也飲食既に如此し其の戸々に於て料理する所の者は皆手本を之に取りて殊更に淡食菜用し身躰を發達し血液を濃厚にするの計を爲すとあらず故に日本の料理を西洋料理に比較すべからざるは勿論隣國ある支那朝鮮にも劣ると識者の常に慷慨する處たり之を概論するに日本人民は上も下も皆未だ滋養食を得ざるものなり。

開化の進步に伴ひて食物の彌〳〵改良せざる可らざる滋養の益す增加せざる可らざるは第五章に於て說述したるが如し然るに現今日本人民の食ふ所ろ如此し安んぞ偉大壯快の歐米人と競爭して優勝劣敗の攝理中に敗死せざるを得んや外國歸の人は其容貌迄以前に異り色白く頰肥え自ら西洋人に似る處あり同じく日本人にして纔に數年間海外に遊歷したりとて斯く人和の異るは啻に文明の風に化したるのみならず第一には食物の爲に然ると判然の理なり又此の歸朝の人々の日本人民を見て恰も外國病院中の患者を見るの歎ありと云へるは實に吾人の痛恨に中れり現に仙が三十年前米國に航したる折和聖頓府合衆國醫事局に入りて國手に面したるに其人指掌の血一滴を取りて顯微鏡下に照し之を仙に示せり之を見るに血球珠を爲して血水の中に浮び整々として亂るゝ所なきが如し然るに仙の血を取り之を照し見れば血球々を爲す者少なく或は歪形を爲すあり或は糖果形を爲すあり大抵散亂して前の整々なるものに似ず仙當時生理學に疎く是れ何等の原因に出るやと訝

りたるに國手は之を滋養食少くして米を食ふの多きに歸し米人中病院にあるの患者若くは身體の大に疲勞したるもの、血は大概如此しと云へり。

批評

○南翠外史の「唐松操」（其一）　南仙子

今日の所謂衙庭的の脚色中に獨り最も壯觀を呈するは南翠外史の作なり。氏の立案は恐く曰へば馬琴のローマンチックを脱せず近來の流行政治的小說の少しく進步したるものに過ぎざれど公平に判斷すれば此頃に珍らしき大結搆にして通常の操觚家が佳人才子束髮演說等を材料とする弱腕にては到底摸倣すべからざる妙あり。氏の作を好まざる者は曰く氏の作はデュマなりと。氏の作或はデュマならん、然れどもスコットなきの國はデュマも又推さゞるべからず。デュマの作奇構に偏く人情に疎なりと雖も堂々たるスコットは啻か、デュマも又今日になしとすれば南翠外史は我國文壇一方の大將と云ふべし。曾て「綠簑談」及「新粧之佳人」を讀み其結搆の頗る壯大なるに驚き又「隱君子」を讀んで時世を描寫せし巧妙に服せしが此「唐松操」に於て更に氏が着目頗る高きを畏敬するに到れり。主人公は大判事なり、是と共に卷中に顯はれし人物は伯爵大臣あり、將軍あり、而して事柄の國事に關するに於ては恐らく是に上越す大仕掛はあるまじ。余は兎もかくも是れ許にても充分推奬するに足れば余は先づ第一に「唐松操」の文壇に光彩を添へたるを祝す。

南翠氏は舊小說家なり、春のや氏現はれざるの前氏は既に馬琴風の文字を以て文壇に雄張し頗るローマンチックの脚色を以て喝采を博せしが書生氣質後の文界一進步をなすに當つて忽然「綠簑談」を作つて其結搆を一變したり。然れども余が眼を以て見れば氏の才筆は充分に其目先を新らしくし文躰を改めしのみにて縱令少しの進步をなしたるにもせよ依然舊脚色にして馬琴時代の陳腐を脱せざるなり。氏の作を嗜好する者は或は此評をもて酷なりとなさんが余は斷じて舊脚色なりと云ふ。英國にてもリットンの趣向は較や我國に類し其傑作と稱するアリス或はストレンジストーリーの如き一二の賛美すべき處ありと雖も我文化文政時代の立案と相去る事遠からず「新粧之佳人」或は「綠簑談」の如きも多少の相違あるにもせよ主人公陪主人公其他全篇の脚色共に相類似し絕妙と云ふべからざるのみか依然として舊小說なり。黑羽二重の着物に紫

一一

縮緬の服紗包を背負ひたる武者修行は飛白の單衣に天竺木綿の帶をしめたる玄關番と代り武藝十八般は政治法律と變じ鍋蓋を以て木劍を押ゆる代に權利義務を口授するの相違のみ、時代變り姿變り言葉變りたれど肝心なる脚色は未だ舊小說界を脫せざるなり。今更に氏の作をデユマなりと事新らしく曰はずとも馬琴種彥が慣用したる脚色の少しく變化したるものにて申さば日本服に着慣れたる人が遽かに洋服を着したるが如く假令柳原物ならずとも何となく借着したる樣に見へてをかし。馬琴は重に極めて冒險心を抱きたる人物を作る事頗るデユマに類したれば馬琴の趣向を襲踏して超脫せざるは若し西洋に求むればスコットの最拙にしてデユマの平凡なるものなり。南翠外史は數段の進步をなし今日に於ては既に五六年前の南翠氏にあらざるも何如せん未だ馬琴風を脫出せずしてデユマとさへも目する能はざるを。若し表面より冷淡に曰へば其主人公はバリストル或は法學士にしてフロックコートを穿ち英語を話し洋裝の佳人と會し輕舸を漕ぎ踏舞を試み公堂に三段法を說き國會に動議を呈するも裏面より仔細に評すれば此開明らしき人物の動作所思は大抵武者修行的たるを免かれず。かゝれば余は世人の喝采するにも關はらず南翠外史の作に服する能はず。二三年前政治小說大に流行し出來星小說家續々雜出する時好んで使用せし人物は民權家有志者專橫大臣等にして演說禁錮ダイナマイトの類は悉く彼等の材料となれり。蓋し人の常として殊に其當時の如き政治熱に浮かされたる人情として凡そ此の如き壯快なる活劇こそ最も面白く感ぜらるゝなれば假令平凡の立案なりとも是等を材料とせしものは幾分か世人に好讀せられたりき。山を好むの情は丘陵にも登り鳥を愛するの心は烏雀をも養ふ、丘陵高きにあらず鳥雀美なるにあらず、唯愛好心の然らしむるのみなれば登るも忽ちに興を失ひ養ふも僅かにして放すに到らん。南翠外史が「新粧之佳人」或は「綠簑談」の材料は大抵出來星小說家が得意に使用せしものと同樣にして其立案の頗るローマンチック——よし進步したる小說ならざるも——は臨時操觚家の摸すべからざるものなれば世人が好讀するも無理ならず。故に余は斷じて曰ふ、南翠氏の作は寧ろ世間流行に投ぜしものなりト。見られよ、氏の作は「隱君子」にせよ「濁世」にせよ「うつし繪」にせよ又此「唐松操」にせよ概ね時俗に應じて一時の喝采を貪ぼりしに過ぎず(因に云ふ世間にて是等の作を諷刺小說と云ふは頗る笑ふべき事にて未だ諷刺小說の定義を知らざる

Digitized by Google Original from COLUMBIA UNIVERSITY

ものなり)。さすれば氏の小說はローマンスとしても充分に珍重すべからざるものにて余は衆人の嘖々するにも關はらず是に敬服する能はず。唯「唐松操」は其中に於て最も出色にして全く時俗に投ぜしものなるもローマンス――よし馬琴的なるも――として貴重すべきを見る。

「唐松操」は三百五十餘頁の大冊にして文字の數にても凡庸の操觚家――今の短文に得意ある操觚家には臚列する能はず、殊に前にも曰ひし如く今の佳人才子的の唯一趣向を立てる小說家には夢にも考ふべからざる脚色なり。其文章も頗る眞摯にして事實斯の如きを綴るに最も必要なる深重の句に富む、殊に大團圓の回の如きは他の摸すべからざる一種の妙ありて味へば味ふほど著者の非凡なるを知る。今此書の最も長ずる處を云へば、

第一　文字の深重なる事。

第二　結搆の大なる事。

此二者互に相合して以て充分の妙を顯はすれ則ち南翠氏の得意にして尋常作者の中々に眞似の出來ざる處なり。若し徒らに深重なるを求めんか、終には晦澁に陷るべし。或は無暗に大仕掛の立案を爲さんか、恐らくは荒唐を免かれず。南翠氏は能く深重の文字を以て大仕掛の脚色を作るも二ッながら其通弊を脫して其長を擅にせり、是れ余が氏の時俗に阿りしローマンチックを喜ばざると同時に又氏の作に注目して輕々に看過せざる所以なり。

雜錄

○輕々しく劍を拔かず　しのぶ

英國大革命の曉星となれるものはジョン、ハムプデンにあらずや、然れども彼れ決して初めより革命を好みしにあらず、彼は優游なる君子なり、圓滑なる交際家あり、愉快ある談話者なり、其のバッキンハムの幽邃閑雅なる居宅に住するや、隣保親しみ、朋友慕ひ、一家團欒したる最とも平和ある士民にてありき。彼の國會に在るや恰かも舵取の舟に於ける如くなりし其指示するまゝに遵るとを得たり、萬人の目皆な彼が上に落ち「ハムプデンは如何ん」との一考慮は斷ず惣の議員が胸中に掛れり。然るに彼は未だ嘗て壯語を吐ず、未だ嘗て慷慨せず、未だ嘗て卒先して論ぜず、其の偶たま論ずる所は輿論を攪動するにあらずして輿論を調停するにあり、其の黨員が時に過激なる動議を呈出するとあれば彼は採決に先だちて

讒埒を退ぞきたり、彼が氣質は元來温和にして眞實に平和を愛したり、不相當の激怒は大ひなる反動を起すことを深く懼れたり。

ハムプデンは夫れ如此き君子にてありき、極めて用心深き、極めて謹愼なる政治家にてありき、然れども彼は決して臆病なるにあらず、亦決して機會を誤まるものにあらず、彼は大抵の事を大目に見たり、然れども不正なる亂暴なる事を苛くも赦すことをなし、嘗て不當の税を課せらるゝや一ファーシングの金と云へども拂はざりき、故に之が爲に牢獄に投ぜられたり、后ち再たび數シルリング(一圓内外)の賦税を調せられたり、彼れが巨萬の富決して之を出しかたきにあらず、然れども彼れ其拂ふ可らず、亦拂ふとの非常なる不正にてあることを知れるが故に、彼は即ち巨萬の富を費やして國王に反對したり。后ち内亂起り、議院軍のチャールス王と相ひ戰ふや、彼は副都督として殆んど總都督の全權を握り、嘗て「戰の粹は亂暴なるにあり、戰の穩和なるは臆病なる也」と論じたり。

ハムプデン豈に弱質の文人君子ならんや。

左れば眞正の改革者は眞正の平和家なり、革命に率先するものは絶叫するとの尤も遲きもの也、非常なる勇猛の人は極めて温柔なるもの也、家に在りては猫となるべく、野に出ては虎となるべし、平時に在りては文人となるべく、戰亂に際しては武人となるべし、彼の徒らに剛強を氣取りて心に安心立命の覺悟すらなきものは果して何事をか爲さん、クラレンドン曰くハムプデン輕々しく劍を拔かず、然れども其拔くや既に鞘を棄てたり。

○女流政治家

南石外史

政治家たらんと必らずしも女流の最長所にあらず、然れども若し之を以て女流の最短所、寧ろ全不能の所ろなりとするものあらば、其人請ふ去つて歷史界に幾多の著名なる女流政治家あることを見よ、殊に其幾多ある中に就て請ふ先づ昔し英國の女王たりしエリサベスあることを見よ、而してエリサベスの赫々たる政德を知んと欲せば、之を英國古今の歷史を知最も精確なりしロード、マコーレーに聽に若かず、マコーレー曰く、英國を支配したる此非常なる婦人の行爲は、國家大亂の時に際すべき政治家が深く攻學し置くべき價値ある所ろのものなり、彼女は其支配せる人民の氣質を悉とく解知し、其の當に働らくべき機會を十分に承知したり、其の握る所ろのものは之を確く握り、其與ふる所ろのものは惠深く與へ、

其の國民に許可せざる可らずと認ためし所のものは、喩へば賣買に於ける如く、之を嫌ながら、惜しみながら、即ち一言にて言へばチヤールス一世が爲したらん如くに、許可するにあらず、常に迅速に、眞實に、之を許可したり、而して若し國民の非難する所ろの害惡あらば、未だ一建白の出でざる前、未だ一演說の爲されざる前に、すでに之を矯正し、平民若し彼女の眼前に隱くれたる弊害を彈劾せば彼女は優温なる言語を以て其の信切を感謝したり、故に彼女の相續人にして若し其の王冠を相續すると共に其の智慧をも併せて相續したらんには、チヤールス一世は其の天壽を終へて死せしなるべし、チエームス二世は決してセント、ゼルマインに逃るゝとあらざりしなるべし。

故に女を評して、彼には此々の事は出來まじなど言ふは恐しきと也、今の政治家位ひになれる女流は少なきにあらず、然れども吾人は今日の女流に向つて政治家たれと云にあらず、只だ男流に向つて彼女輩隨分政治家になれると申すのみ也。

○汝曹宜しく互に足を洗ふべし　みどり

保安條例實施の翌日、其實施の理由を質問して科刑の不當なることを抗辨したるが故を以て、片岡氏以下と共に囚らへられたる高知の志士坂本直寛氏は、其獄中の日記を幽囚記事と題し、近頃ろ「眞理之鏡」に寄送せられたり、吾人之を其紙上に通讀し、彼の「風窻に書を讀めば古道顏色を照らす」と云へる一舊語に、更に新高なる一種の情味を加へたるとを悟れり、幽囚記事の一節に云く、

又厠を掃除せし時の如きは余頗る不快無き能はざりき去れど退きて主イエスクリストが天の聖坐より降り賤しき者と共に住みガリラヤの漁夫の子等の足を洗ひ吾人に其式を遺し給ひし事どもを追想して大に不快の情を制するを得たり余は斯く主の爲し給ひしとを回顧せば其忍耐謙卑は吾人の以て遠く及ぶべからざるを感じ來れり嗚呼諸王の王は人の忍ぶべからざる屈辱を忍び耐ゆべからざる艱苦を耐へ人の爲し能はざる謙卑を爲し給へり余や身、貴きに非ず位あるに非ず權あるに非ずして漫に人を憤り人を輕んじ傲慢にして自から高くするの思慮、散無き能はざりき之何ぞ主クリストイエスの聖旨に適ふとを得んやクリストは神子にして罪人の足を洗ひ給へり余や同囚同志の厠を掃除するに於て何かあらん。

獄中に大悟したるもの多し、然れども彌よ「愛」の情理を解識するに至りては眞敬を知るものにあらずんば能わず。

○新婦、花郎に送る　かすみ

嘗て記るす、新たに婚するものあり、婚后第一日の彼等が日記に左の如き英詩を錄したりと、一讀するに頗ぶる味ひあり、只だ其譯しがたきに艱やむ、

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

THE BRIDAL VEIL.

1. We're married, they say, and you think you have won me,
Well, take this white veil and look on me;
Here's a matter to vex you and matter to grieve you,
Here's doubt to distrust you and faith to believe you,—
I am all, as you see, common earth, and common dew;
Be weary to mould me to roses, not rue!
Ah! shake out the filmy thing, fold after fold,
And see if you have me to keep and to hold-
Look close on my heart--see the worst of its shining -
It is not yours to-day for the yesterday's winning, -
The past is not mine—I am too proud to borrow -
You must grow to new heights if I love you to-morrow.

2. We're married! O, pray that our love do not fail!
I have wings flattened down, and hid under my veil,
They are subtle as light--you can undo them,
And swift in their flight--you can never pursue them,
And spite of all clasping, and spite of all bands,
I can slip like a shadow, a dream, from your hands.

3. Nay, call me not cruel and fear not to take me,
I am yours for my life-time, to be what you make me,
To wear my white veil for a sign or a cover,
As you shall be proven my lord, or my lover;
A cover for peace that is dead, or a token
Of bliss that can never be written or spoken.

○男子を見る女性の眼孔

是空子

女子はいつも男子に見らる丶なり、而して男子が女子に見らる丶と少なし、如此く亦男子が女子を評すると至つて多し、而して女子が男子を評すると極めて少なし、但し少なきにあらぬかは知らねども何分其聲の聞えぬが故に甚だ少なきやうに思はる丶なり、故に吾人は其少しくある一二の評を集めて、女性が男子を見るの眼孔極めて鋭どきとを御覽に入るべし、衆此の聲雷の如し、况んや天軍の樂は万字にひゞくにあらずや。

希臘のイウリピデスより亞米利加のハエルに至る迄で、女人に對するの評は頗ぶる多し、左れど殿方に對するの評は只だ佛國婦人の議論に出しのみ其他に甚はだ少なし。先づ、マダーム(夫人)デウ、アガウト曰く、男子が女性を見るより女性が男子を見拔くと多し、凡そ人を見るは交際社會にあり、而して交際場裏は男子が尤も氣を許し安心せんとして來る所ろにして、女子が尤も用心し善く見られんとして來る所ろあり、即ち男子は總べての武器を棄て丶來り、女子は全身に物の具を覆ふて來る、左れば女子が此に於て男子を見拔こと當れり、男子が女子を見拔こと

多くは誤まれり。

マダーム、ヂウ、デッフハンド曰く小說も歷史も男子の性狀を寫すと甚はだ微かにして女性を寫すと少なし、男子の氣性は萬人に開帳せられ、女子の心中は深く秘くさる。

マダーム、ヂウ、アガウト又曰く、好し右に云ふ如きとあらずとするも、女性の間だには母より娘に、娘の母となるものより其娘にと、代々に言傳へらるゝ秘傳あり、たとひ世上の文學おしと云へども、女性が男子を見る考への虎の卷は親より子へと讓らるゝ也。

マダーム、ローランド曰く、尋常の男子は思慮すると少なく、評判を輕々しく信じ、天性のまゝに働らくなり。

マダーム、バチー曰く、男子を左樣に利口なるものと思ふ勿れ、男子は必ず或る一點に於て全く暗愚なるもの也。

マダーム、ヂウ、ギラルヂン曰く、男女別に優劣する所ろあらず、然れども聰慧なる男女を比較するに、男は女に優れる如し、只だ之れ如此き男子は、彼の女の氣質に、時としては亦た女の弱點の所ろをも加へて、更に男子特得の包容的氣質を所有するがゆへ也。

マダーム、ヂウ、グランドフホルト曰く、殆んど總べての國々の婦人は佛國人を愛す、之れ其の勇猛なるが故なりと。又曰く、余れトゥラン（佛都）に住ふと半歳なり、全都の男子只だ一人を除くの外は皆な其妻に支配せらるゝを見たり、而して此の一人も亦た近隣の婦人に支配せられ居たり。

女學生諸君、必らずしも斯く殺風景ならずして、少しづゝはお手軟らかに男子を批評して見らるべし、特に今の政治家など云ふ輩らを批評して見らるべし、今に於て諸君の眼孔を鋭どくし置く實に宜し、來年の國會人物に最も重き一言を評下するは萬人にあらず、君一人にあり。

○歸鄕歎　しきたへ

去る可きか、嗚呼去らざるを得ざるなり、去らざるを得ざるが故に去らざるを希ふなり。門に倚て送らるゝ諸姉よ、暫らくは相見ざるべし、親愛すべき師父母に健全なれ、園中の松柏色新たなるも余は汝を捨てざるべからず高壯なる學舍巍々たるも余は汝を離れざるべからず、萬斛の感慨に筆頭重り哀別の情に口亦啞たり。淡光の新月に添ふる玉笛の音を聞て漫ろに故山の雙親を思わしめしは何者ぞ、秋色深き邊り虫聲の繁々たるに孤客の情あらしめしは何者ぞ、三更夢を驚ろかす子

規の聲に轉た天涯家鄕の空を望ましめしものは何者ぞ、今亦故山に向はんとするに際し余を止むるは何者ぞ、是れ一つの愛か、愛よ汝は余を止めんと欲するか或は余を去らしめんと欲するか汝何ぞ茫漠の間に余を苦しむるや汝あるが爲めに余は樂めり然れども汝あるによりて余は悲しむなり愛よ愛情よ汝は余を何處に置かんとするか。

○詩を描くなかれ　　輕快子

隨園詩話續篇に浦柳愚山長云く詩は心に生じ手に成る然れども心を以て手を運らせば則ち可なり手を以て心に代へば則ち不可なり今の詩を描くもの東に拉し西に扯し左に支へ右に拵す都て故紙堆より來る性情に從て流出せず是れ手を以て心に代ふるなりト。獨り詩のみにあらず文をも描きて得意なるあり、凡て詩文は思ふ事を顯はすものなれば文字の徒らに奇麗なるは却て面白からず。元より辭達主義にお百姓の上書の樣でも困るけれど文字の味は一種不思議なる邊にあり。前に引用せし言の如く心に生ず詩を手を以て連ぬればこそ名篇佳品を得らるゝに唯文字のみに拘執してあせればあせるほど其詩は細工物の如くなりて自然の神韻を失ふべし。例へば美術品にて描金の塗物は見事なるに相違なけれど見事と云ふ丈にて面白味は少しもなし、殊に是等はドンナ田舍漢が見てもピカ／＼するだけでも一驚を吃すべければ俗客の愛を充分買ふに足れど眞正の趣味ある人は却て好まざるなり、勿論是も名工の手に成りし稀世物あらば兎に角其稀世物を模範とせし凡常の蒔繪類は俗醜ありて大に厭ふべし。笠翁は一生松杉等の粗材に塗りしと、是れ工匠の心掛くべき事にて眞正の伎倆を示すに高貴の材を避くるは一には俗醜に陷るを防ぐべきなり。されども是等はさまでに材料に關せざれども例へば寄木細工人が無暗に唐木を用ふるは却て韻致を失ふものあり。近き例に西洋家屋の流行するや、無雅なる人々のペンキ塗の門を建てゝ西洋ガルも頗る笑ふべし。詩文を作るもの常に塗抹主義を專一にし鏝細工流義に些細な字句に腦み思ふ事を十分一をも云ひ得ず或は無理に曲げても美しき文字を列ぬるに骨折るは馬鹿々々しき事なり。丁度前に擧げたるペンキ塗の門を尊ぶと全樣にて徒らに巧を求めて却て拙に陷ゐるなり。芝の御廟は赤く靑く或は白く色々に塗りたるをもて美觀と云ふにはあらぬに、そを猿眞似に叩き大工の手になりたる稻荷堂を五色に塗りたるは野卑に陷りて厭ふべし。白氏は唐代にあつて最も美麗なる文字を用ひ牛叢

馬卒も是を傳稱せしほどなれども、白氏の天稟なる詞才に於て是を許すべし、若し其詞才なくして是に摸倣すれば俗醜猥陋に陷り游子娼婦の玩弄物とあるが關の山なり。抑も詩文は脩辭達にて止ものにあらざれば字句の巧を欲するも可なり。されども字句の巧を先にして或は語呂のよきを欲して無暗に奇麗なる文字を使用するは田舍漢が趣好にして眞正の美術心ある人より見れば嗤笑に堪へざるなり。羽倉簡堂が曾て非詩人の詩を選みしは頗る卓見にて詩人の詩は巧はあれ共文字句格に拘泥して纖弱に陷り易き故也（詩人とは日本の所謂詩人にて學問も淺瀆なるを云ふ）。梁川星巖は近代の詩宗にて今日の後進が詩を學ぶには大抵其作を摸範とすれども唯正確に美しく出來たりと云ふまでにて一唱三歎すべきものとては少なし、見るべし星巖の門に游びし人々の今に殘りしは詩學の先達と仰がるれど一二を除きては其句は概ね纖弱に陷りて見るに足らず。凡て何事に依らず拘執する處あれば自然牽制せらるゝは數の免かれざる處なれば詩文の如きも章法句法を墨守し美麗なるを飾らんとすれば勢ひ淫靡輕浮とありて少しも妙味なきものとならん。されば唐詩に於て見るも律は對聯に苦しめらるゝ爲か神韵を缺きしもの多く、巧なるは巧あれど却て細工物の如く覺へて高尙雅馴の質を失ふもの多し。是に反して古詩は平仄に縛らるゝ事なければ自在にして高遠の姿あり、夫すら一韵到底はいくらか縛らるゝ氣味ありて四句換韻に及ばず。英詩に於て見るもテニズン或はポープの句は文字艷麗にして句格正確なれども自在なるミルトン若くはドライデンに劣る。契沖の河社に人の言を引て古今の戀は情深し新古今の戀は面白味ありと云へり。俳諧を以て見るも芭蕉の句は心に思ふ有の儘を咏みしものあれば一種の云ふに云はれぬ妙味あり、

　木がらしの身は竹齋に似たる哉

　五月雨をあつめて早しもがみ川

　梅が香にのつと日の出る山路哉

然るに後世に到りては段々に巧を競ふ樣になりて梅室蒼虬等の名流一二を除けば巧に失して俳道の所謂る禪味――「古池に蛙飛込む水の音」的の禪味はいつとなく俗臭を帶びて中に雪門の如きは最も此病弊に罹れり。是等はいづれも巧ならんと欲して自然を失ふものなり。かゝれば詩文は元より巧を嫌ふにあらざれど強て巧を求めんとすれば思ふ事を曲ぐる樣になりて詩文の本旨に背き却て風韵を缺くに到らん。セキス

ピヤの絶代の奇才を以てすら巧妙なる文字造句の爲に肝腎の情致を損ぜし處ありとアヂソンは云へり。ホーマア市に歌ひ李白灘に囀く、口沫の散ずる處悉く自在に成りて神韻を帶びたり。彼等は巧を求めずして巧を爲す、後の凡常の人は強て巧を欲する故に其巧は細工物となる。詩文を好む人は鑑みて作るとも決して描く勿れ。

○戀にはまる堀川

中立賣堀川のほとりにて、三十ばかりの男をとりけるが、西のかたよりとしごろなる女房、下女をめしつれをとりあひ、此おとこをみてにや〳〵と笑ひより、疎忽なることながらそもじ様を、さるかたへお供申たきとなれ〳〵しくいひければ此おとこつねに色このまぬにもあらねば、さすが岩木ならずかの女のあとにたちてゆきしに、れき〳〵の家ゐなり、やがて路次の戸を引あけ、屏風引ちらしたる座敷へよび入、色々馳走し、さてかの女房いふやうは、ちかごろ申かねましたがわたくしは此家のむすめ子に乳をまいらせしうばにてござりまするが、ことし十五になりたまふが、方〳〵から緣組を申

まいりますが、そもじ様にひとめおはせまいらせたく存まして、これまでおともいたしましたと、手をとりおくの一間へつれゆく、男夢かうつゝかと思ひながら、ふるひ／＼屏風のそばまでゆきけり、うば、むすめのまくらもとへよりていふやうは、もうしおまへ様にかゝせられますおと申證據は此人を御覽じませ、おかきなさるゝとそのまゝ、あの人のかほのやうに、みつちやになりまするといふた。

○火桶のうはなり

女の性はひがみてつねに嫉妬ふかきゆへ、佛も五の障ありと説たまふもことはりなるかな、下京邊に、玉椿の八千代とかはらぬちぎりをつがねてすむ祖父と祖母ありしが祖父七十にあまりて寒氣に堪がたければ、土火桶をもとめひるはひざをはなさず、夜は夜床に入て、年よりたる身は思ふとも心にかなはねば、そなたを抱て身のしはをもあたゝむれば、祖母にはまさりていとおしのつまやとて、火桶をなでさすりて調法しけるを、うば聞てはらをたて、にくの祖父がことばや、惣じてあの火桶がうせおつてから、祖父がおれにかほつきをわるうしをる、あら腹たちやと思ひ、祖父が隣へゆきたるるすに火桶を引出し、そのれめはよくも／＼おれが祖父をねとらうとしおるな、此うばが目の黒いうちは思ひもよらぬと、はやう出てゆけと、火桶を取て溝の中へなげしに、火桶の火に水入しかばぢい／＼と鳴しを、祖母聞てあら腹たちやまだおのれはじいとぬかすかとて、うちくだひてすてた。

○見ぬ大内のよせひ

思ふとかなはぬ浮世をさん／″＼ともちらし、京に住うかれわづまのかたにしるべ有て下りしが、宿の女房いふやう、さても／＼京の衆はものとやさかたな、さすが内裏樣のお國ほどござる、さぞいきた公家衆や内裏上らうをたくさんに御覽じやらうといへば、京の者文盲ありしが、色／＼身の上によせて咄しをするやう、おれは京では禁中樣の御用をつとめました、其時分は御所樣がたへ參れば、直におことばにあづかりて、はて扨ようきたとみすのうちへよばせられ、きさきこいやいと仰られたれば、何が天人のやうあがうんかはどおいでなされて、なんでござんすとおつしやれたれば、あの烏帽子屋に、きのふかんばくからくれた、くし柿を三くしとらせいとおほせられたと。

最可笑者舒行緩步輯以微辭以發相度竟同木偶兒戲

叔[illegible]子

兒籃

○小鳥の話し　　さ　な　へ

ベニーさん籠の中に鳥が居ませんよ　ソーたれが逃がしたのだよジエームスさん御前さんデショー　われうそ私は今見た計りですものあなたがさつき餌を御やんなすつたではありませんか　エーあの時は籠の内に居たのデスそんならきつとブラオンさんが逃がしたノダ　ソーデもありますまいブラオンさんは今日一度も來ませんもの　ソーデなくば下女のベンでしようベンの馬鹿が逃がしたに違ひない　ベンでもありますまい鳥が自分で逃げたのでしよう　そんな鳥があるものデスかきつとあのベンかブラオンが逃したノダと大聲を上て怒て居ますと木の上で一匹の小鳥が　やかましひ子供ダお前がさつき戸をすかして置たからジエームスさんの御つしやる通り自分で飛びだしたノダ御前は人の事を馬鹿と云ふが自分が餘程馬鹿ダそんなに人を疑ふものではないよ

○わる較計（一）

私はムーアと申す老人だ十の時に學校の一番暴れ者で私の級の小供は皆な私には家臣のやうに從て居た、ダが暴るかわりに勉强も隨分よくした級の中で三番より下へ落た事がなひからムーアさんはいつもよく出來ると云ふ評判であつた然るにある冬の試驗に二三ケ月前に入校したジヨセフ、ギツトと云ふ子供が一番になつて私は運惡しく勉强した甲斐もなく五番に下げられた殘念でたまらないから何かしかへしをしてやろうと思て居たがこれぞと云ふ事も見出しかねた、するとある日の事私は教員室へ呼ばれたから何の氣なしに行て見ると彼の惡らしひギツトが私の顔を見て笑たその笑ひ顔のうちにはいやらしひあなどりの様子が見えた。

先生何か御用で御坐いますかと腰を屈めて聞くと先生が今日は私しの家へギツトさんと一所に遊びに御出でなさいと云われた惡らしひギツトとまあどうして一所に行かれようと思て居ると教師はなほいやな事を云はれた途中一所に手を引て私の家迄離れぬようになさいと堅く申し付かつた。もう私しはたまらない、先生私は他に約束がありまして參らねばなりませんしかし折角の御招ぎ故その用を濟しギツトさんの御あとから參りましよう。

西郷南洲云く我家々法人知否、爲子孫不買美田と。漢書韋玄成の傳に子に黄金滿籝を遺すは一經を遺すに若かずと。

史傳

○魯敏孫漂流記

ふ、ち、

デフオーの名は魯敏孫漂流記を以て知らる、縱令其述作は此類にして殆彌日記或はモールフランダーの如き共に傑作なりと雖ども若し魯敏孫漂流記の著なくんば氏の名は文學史中に唯朦朧と現はるゝのみならん。スコツト或はセキスピヤは元より空前絕後の大家なれども魯敏孫漂流記の愛讀者多きには或は一步を讓るべし。要するに人の嗜好は各自に異なればミルトンを嫌ふもサーバンテスを毀るもあらん。唯此魯敏孫漂流記のみは老幼となく學びしと學ばざるとの別なく等しく好讀して措かず。英國の如き兒童此書を耽讀して庭に穴を堀り小屋を作り以て彼ルーソーに擬するありと曰へば英國の元氣を保つに大に功ありと云ふべし。

デフオーの一生を案じて此書を考ふるに斯の如き不平に日を送りし人の著なれば或は世路の困難を寫し自營自治自發自衣の理を諷せしものならんと云ふもあり或は作り物にあらで實事を記せしなりと云ふもありて諸說紛々たりしが著者在世の日には全く著者が想像より成る假作小說と極まりし。然るに其歿後に及んで世間眞にロビンソン、クルーソーあるを發見せり。即ち其人はアレキサンダー、セルカークにして魯敏孫漂流記の一篇は悉く其履歷より成る。

セルカークはダムピアン、フアーナンデズなる無人島に獨棲せしが千七百十二年に旅行記を出版せしクツク氏の一行の爲に見出され終に其冒險事業を世に顯はせしが頗る奇事異聞に富みたる事史傳類典に見へ船長バーチイ氏も又是を集錄したり。

ロビンソン、クルーソーは實にセルカークの冒險紀事に胚胎せり。クツク氏が初めてセルカークを識認し時「彼が山羊の皮を着したる樣は皮の初めの所有者よりも粗野に見へ彼は二つの小屋を作り一を寢室となし一を庖厨となし山に狩り海に漁り或時は農夫となり或時は陶工となり或は賛美歌を唱ひて神に祈り、或は山羊を牧養して其肉を喰ひ其乳を飮む」等悉く漂流記の材料たらざるはなし。

セルカークの冒險紀事出版の後一年スチールは大に注目して自らセルカークを訪ひ世間未だ聞知せざる異事を千七百十三年十二月出版の「英國人」（雜誌の名）に投寄せり、其記する處に依れば「セルカークは其動作より考ふるも暫らく人界を隔離したる事を判然証すべく容貌は頗る嚴肅なれども何媚となく愛敬ありて威を添ゆるに足る常に沈默して深く考ふる處あるが如く左右のものに注意せず屢々＝最早孤棲の安穩を樂しむを得ず＝と嘆息して大に人界に歸りしを悔めり」と。スチールは再び此野人の珍らしき變化を附加して日く、「余は數月の後道路に彼と邂逅し彼は余に親しく話掛しが余は其何人たる思出す能はざりし彼は都門の空氣を吸ひ次第に雅びて全く動作の孤島の遺風を帶びたるを失ひ粗野なる容貌は凡て變ぜり」。此等即ちデフオーが著作の種子とも云ふべきなり。

然れどもデフオーが著作も率然として現はれたるにあらず。氏は其政事上の爭に關渉して結網に處せられ獄中にて病に罹り發憤若惱徒らに呻吟して慰むる人なく其果は終にセルカークの孤棲を思出しスチールが精細なる記錄も胸に浮び我獄窓の別界をセルカークの無人島に比し、追懷餘りあつて獄を出るの後天資の文才をもて作りしは即ち魯敏孫漂流記にしてセルカーク世界に出でしより七年後千七百十九年なり。

かゝれば漂流記は全く想像より成りしものにあらざれば奈むべからずと云ふもあらんが、其當時の記錄に依ればセルカークの事蹟世に公けになり是を記述し或はせんと試みしもの多けれど一人として成効せしはなく、唯デフオーの筆能く二三百春を經たる今日にクルーソーの奇聞を傳へ兼てセルカークの名をも殘したるは其遺文の致す處ならずや。デフオー漂流記を著きし時五十八歲。

小說

○眞才子

麻溪居士作

中卷（乙）

夫から叔父の家に世話になつて、ある學校へ通て居る內、また例の病氣が再發して、學校の試驗に及第しやうが、落第しやうが一向頓着せず、畫ばかり書くことを每日勉强して居ました。然し此度は武者畵や、狐なんぞではありません。繪草紙屋で見て來たのや、新聞にある繪なぞを摸寫するのです。それも朝は早くから起て、夜も遲くまでゝす。――實に阿漕の浦にひく網、――度々どころか每日……しかも朝から晩までゝすから、とうとう叔父に叱り付られて、成業の望が無いとまでに言はれました。そして（田舍へ送り返す）と迄キツパリ云れました。時は此時――私は實に手を合せて詫ました。

Digitized by Google
Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

泣て詫たのです、叔母の袖にすがつて頼だのです。

△父「お前はいくら泣ても、……元お前を此東京へ連て來たのは、立派な人間にしてやろうと思つて連て來たのだ。此春から幾度叱つたか知れないのに……、いくら言ても聞かず、……もう仕方がないからお前をお父さんの處へ送り返さうと思つて居るのだ。

「私が惡う御座いました、……實に、……實に惡う御座いました。是れからきつと……きつと畫を書くことを止めますから田舍へ歸ることだけは……、どうぞ叔父さん……御免なすつて。

△「いけません、いくら言ても無駄です。お前に其癖がなをるなら、……とつくに直さなければならないのだ、それに今になつても……。

「イヱ、もう此度はきつと……きつと直します、どうぞ叔母さん、叔父さんに……おやまつて……。

○母「私しもお前には、蔭になり日向になりお止よ〳〵と言のに聞かないのだもの、……だから仕方がない……だからお前が……惡るい。

「平常からおつしやる事を守る積りで御座いますが、……私にはどうも……。

△「お前はどうしても畫を書ずには居られないのかへ。

「私は書まいと思いましても、……どうも……ですが是からはきつと、……致しませんから。

△「イヤさ、お前がどうしても書ずに居られないといふ理由ならば……、それはもうお前を私の子にしやうと云ふ譯じやあなし、お前のお父さんさへ承知なら、お前を畫工にして一生涯を送らせてもかまはないが、何しろ私しが初めお前をつれて來たのは、官立學校へでも入れて立派な官員にでも仕樣と思つたのだ、だがどうしてもお前は田舍へ歸るのも嫌だ、學校へ行のも面白くない、唯畫が書きたい習ひたいと云ふのなら、お前のお父さんに相談してお前を畫工の處へでも養子にやるか、さもなくば畫を習しにやる外に仕方がない。

此處に頼の風吹けば、——彼處に望の花が咲きます。私は叔母の顏を見るに、是も愁の眉少しく開きまして。

○「さうです、一ッそ此樣に畫が好きなものなら繪師の處へでもやつて好た道を習したら宜しいかと存じますよ。

△「さう、

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

猶も叔父ハ私に

△「お前はどうしても畫が習いたいか？。

サア此一言の返事、——「ハイ」と答へ樣か、また「イヽエ」と返事をしましやうか。前には手を合せて畫を書きませんから、田舎へ返す事を止てくれと頼だ上、「ハイ」と答て若し叔父の聞入なくて、田舎へ送り返された時は、——「イヽエ」と答て再び學校へ通ひ、また其嗜好の廼つた時には。——右思左考の思案の裡にも、意地の惡いのハ時計です、チッチ〳〵と私の返事を催促する樣です。悲しいのは小供の心——、充分自分の考へを吐露して、先方を承知させる方法を知ません。其中にまた叔父の言葉です、——利刀の樣な鋭い聲で。

△「サアどつちだよ、……默て居ちやあ解らない、早く言な

まだ考は道草を食つて居ます。頭はだん〳〵前へ垂れる計り、心には種々の考が浮んで來て、思案は亂れる計です。處をまた叔母の言葉、

○「お前……、どつちでも早く言てお仕舞な。

もう躊躇する時がありません。心は定りました、私はどうしても自分の好む處に從ふ樣に決しました、縱令叔父さんに叱られても。

「叔父さん叔母さん、斯う申しては……實に何とも恐入ますが……、私の父にお話しなすつて、私が畫工にある樣に父に御話し下さい。

叔父も顏色を變へました、額に波をよせて私をにらみつぶした其すごさ……。叔母はじつと目を叔父の方へ注いで居ます。私は下を向たばかり、衣服の縞を計算して居ました。

△「じやあどうあつても……、外の事は嫌だから畫を習い度と云ふのだナ。

叔父の心にはまだ未練が殘つて居ます。叔母も其通りせめて「イヽエ」と言したい風情で、私に向て是も鋭い聲で

○「お前は畫工になりたいのだナ。

一度開渡した城です、——もうどうする事も出來ません、私は斷言しました。

「ハイ、畫工になりたいので……御座います。

叔父叔母共に暫くは默然として居ましたが、是もまた決定した樣です

△「じやあお父さんに左樣言て問合せて見やう。

それから叔父は手紙を書て父に問合せました。すると父は〔一度お任せ申した子ゆへ宜しい樣に〕といふ返事です。そこで

叔父は知己の繪師へ私を居候同様に送りました。此時程心に悦しく――樂しく――有難く――思つた事はありません。手に取扱ふ物は繪具皿です。目に見るものは山水、花鳥、人物です。時々私にも繪具を使はせます、其時の面白さ――私が丁斑魚となつて水中に音樂の美を聽くとを得ても……此程悦しくありますまい。毎日日が暮るのが惜い樣です、寢てからも夢には人物、花鳥、山水の彩色です。此樣になつて見ると、極樂は先の世ではあく、今日の前にある樣でした。

寄書

○得意と失意

此頃偶〻民友氏の「得意と失意」を讀み頗る感する所あり記して女學記者足下の一條を求め併せて其餘白を塞まれんとを乞ふ　秋香小史拜

失意、撓折、世に此徒多し彼等は一たひ撓折して復た起たす起たざるに非るべし然れども彼等は遂に再起する能はざるなり斗筲の輩は何等の事にても苟も其意を失へば輙ち撓折せり是れ何をか言ふに足らん唯一片凜然たる勇往不顧の氣象を具ふる者にして間々仮に再起し難きの撓折に陷れり嗚呼彼等は如何にして撓折せるか吾人は彼等の心事を觀て轉た其哀情を禁せずんはあらず。

大凡そ人の世に在る何人か望む處なからん然り而して何人か能く其望を成せし者ぞ成就すべからざるの望を抱き而して遂に成就せざりき彼等は獨自ら撓折せり是亦憐むべし然れとも必ず成るべきの望、而も甚だ正しき望を抱き而して成らず是れ豈深く憐むべからずや彼等が得んと力めて遂に得ざりしは猶可なり已に得若くは殆と得て而して遂に得る能はざりしは豈更に深く憐むべからずや是等の徒の多き中に就て其割合の多きは最も清潔なる最も偉大なる望を有せし者なり唯最も偉大なり故に障碍を受くるの地も廣し唯最も清潔なり故に甚た清潔ならざる社會は之を容れず否な社會は彼等を喚て狂となせり妄となせり彼等か失意の多き撓折の大なる、所以なきに非るなり蓋し浮世は實に此の如くなるなり此の如くなればこそ浮世なるなり左れば浮世の情勢を悟了せる達人の爲めには慟哭せる彼等も慟哭せしむる社會も共に其冷然たる一笑に附せらるに過きず彼等は固より豫め之を知らざりしに非ず幾分か之を覺悟せざりしに非ず只其れ彼等は深く自ら信じ自ら恃む所ありしを以て一敗即ち聲を放て慟哭するなり如何に浮世の常態を達觀したればとて多感多涙なる彼等は遽く浮世を棄つる能はず達人たらざるを以て彼等を責むるは彼等の爲め寧ろ甚た酷ならずや。

若し夫れ吾人が觀想をなして竿頭の一歩を進めしめは吾人は更に深く彼等の爲めに慟哭せさる能はず看よ世間幾多の得意男子を、揚々として大笑せり放肆せり失意の徒を指して曰く彼等は迂愚なり狂妄なり彼等の撓折せるは彼等が迂愚狂妄の報酬なりと而して此得意男子を看よ彼は不正不德なるに非るべし然れども試に彼が其意を得し道行と他の者が其意を失ひし道行とを對照せよ而して得意は多く利口上手、飾なく之を言へば陰險巧黠等より來るを看よ吾人は更に彼等多感多涙なる血性的男子の心事を憐み更に其慟哭を深くせざる能はず。

然れども彼等にして若し一の知己即彼等の衷情を察し彼等の失意を認容する一個の知己を有せば彼等は斯くまてに撓折せざるへし然るに四顧茫々歌ふ者、笑ふ者、仰臥する者、酣醉する者及ひ指笑反目する者の中に存り煢々然として一種の荒涼影暗き邊に其微歎の聲を漏らし而して空谷寂然之を吊ふの跫音なしとせば彼等の心の苦しき如何ぞや蜂は却て泣面に向て來る許多の苦痛は這般の徒に蝟集するものなり。

乍併彼等も亦過ちなかりしに非ず彼等は甚だ眞摯なり率直なり彼等は天眞爛慢一の正理によりて動き一箇の感情によりて言ふ、彼等は眦づる處なし故に甚た辨解せざりしなり、彼等は恃む所あり故に甚た馳騁飛揚せざりしなり是れ彼等が失意撓折せる所以なり然れども是を以て彼等を咎めんとするは抑も亦心なき業に非すや。

嗚呼面白ければ則笑ひ哀しければ則ち泣く直情徑行包藏する所なし此神聖なる罪なき行爲に向て社會が與ふる報酬は常に一ちの失意なり而して得意は表裏反覆の人に來たる嗚呼失意實に憐むべし然れども此の如くんば則得意の徒も亦却て憐むべきものならずや觀して茲に至れば吾人は彼等と共に慟哭の涙を收めざるへからざるなり。

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

新報

○賄賂事件中の確定罪

大岡育造氏對東西新聞の公判によれば、賄賂事件は喋々として眞僞未だ明らかならず、只だ其間たに於て正大なる輿論が決して容赦す可らざる一種の罪証を得たり、即はち細地源一郎、沼間守一、高梨哲四郎、大岡育造等の諸氏は、或は公然に、或は假名して、或は流連し、或は頻々に彼の所謂なる遊廓に遊びたりとの一事之れ也、而して判事は「余も二十年前書生の時には出入したるが」と云ひ、妓樓の主人は堂々たる紳士に向ひ「迚も茲にて在外に申されず一夜御遊興なされましたらば」と云ひて、聽くもの決して許します、寧ろ愉快に絶笑したり、儼然たる大日本帝國の法庭裏一人の怫然として之に怒るものあらざりしと云へり、嗚呼我國に於て紳士と稱せらるゝものゝ私德、及び彼等が間だに成立する所ろの公德なるものは果して如此きか。他日外人ありて若し一々此の公判筆記を譯し之を歐米の新聞紙上に公掲する者あらば何如ん。起きよ輿論、汝ぢ先づ此等の罪証を捉らへて非難し、詰責し、天下に向つて日本の輿論は決して此等の不潔を容赦せざるとを確証すべし。

○現今社交上の天女

民友氏は其國民之友第五十七號に於て、社交上の一大不思議と題せる有力秀逸なる論文を掲載したり、實に言ふが如く醜妓の當世に跋扈するは絶大の不可思議とすべし、論者あり若し彼等を排斥せんとすれば交際社會の輿論は寧ろ彼等に同意して彼等を排斥するものを排斥す、然れども吾人は如此くにして交際社會より排斥せらるゝものゝ彌よ増加せんとを祈る也、ピウリタンは英國の交際社會より排斥せられたり、其排斥せらるゝと彌よ多く遂に洋外米洲の異境に到る迄でに排斥せられたるが故に、彼等則はち新合衆國を結構したる也、之を以て吾人は今の交際社會にます〳〵多くの偏屈者を出し、分らずやを出し、武骨者を出し、不粹者を出し、此等の除け者、脫走連、日に日に寄集りて遂に一新交際國を別製せんとを祈る、而して此事蹟し、質朴なる眞摯なる謹嚴なる大業なる純潔なる平民的の新青年に就て尤も多く期望すべき所ろのもの也。

○各地青年の運動

一二年來の尤も活潑なる末頼母しき運動は何事ぞと人の問ふあらば、吾人は新日本の青年が運動大ひに現はれ來りしの一事なりと答ふべし。今まや各地到る所ろに青年會あり、而して其各青年會より、或は謄寫を以て、或はコンニャク版を以て、或は立派なる活字版を以て其器關雜誌を出版するもの實に多し、吾人特に喜んで此等の雜誌を愛讀するに、其の文章には固より感服すべきものあり又惱るべきものあり又時としては大に忌わしき者もありと雖ども、其の大勢は皆な新鮮、自由、奔逸、の氣に滿ち、喩へば千里の駒正さに韁を離るゝの勢ひあり、而して彼等が慕ふ所ろは平民的也、眞摯的也、快活的也、吾人此等の雜誌に接する每に、初めて密かに眉を開ひて將來之日本の爲に大祝賀せざるとなし。嗚呼保守黨よ、佛教徒よ、官員よ、老議官よ、舊學先生よ、若し君等が向來の命運を知らんと欲せば、請ふ先づ目鏡を拭ふて此等各青年會の運動を見よ。

○現時最有益なる女學運動

は此等の青年に向つて女子を輕んぜざるの志想を吹込むにあり。大凡そ今日に當りて女子敎育論を主張するも可也、女風改良論を主張するも可也、民法刑法の上より女子の平等權を主張するも可也、更に進みて政治上社會上に於ける女子に平等權を主張するも可也、然れども此等各部の運動に先だちて先づ惣躰の大運動に着目する所なかる可らず、之れ今日に於て尤も必要にして最も有益なるもの也。敵を射んと欲せば先づ馬を射よ、女權を擴張せんと欲せば先づ庶民衷心の感情を一改革せしめざる可らず、今日女子の敎育、權利、地位に就て暴論多きは、其論理上より來るにあらず多くは感情より來るもの也、故に若し先づ此の感情を一轉せしめ、今の庶民をして彼女性を其自然有の儘に見解するに至らしめば、敎育家は則はち公平に女子敎育論を論じ、法律家は則はち公平に女子に對する刑律を定め、政治家は則はち公平に女子に與ふるの權利を考ふるに至るべし。左れば今日の女學上運動の要務は目立ざるにあり、片寄らざるにあり、公平なるにあり、感化するにあり、知らしめずして變ゆるにあり、沈々寂々として滿壇を浸すにあり。此に於てか切に青年の運動に注意するの必要を悟れ。

○ペルッ氏の女子敎育論

去る廿日大日本敎育會總集會あり、吾人は會員にあらざれば行て拜聽するともせざりしが種々の演說ありしと聞けり、中にも多年帝國大學にあり、專々に日本在來の事物に贊成して巧みに本邦民の氣に適ふとを爲さるゝペルッ氏は、江馬聽男氏の代辨によりて女子敎育論を演述せられたる由、新聞紙によりて其大意を聞けば、

日本女子學校の敎科中に哲學代數幾何化學星學社會學等の科あれども此の如きものは無用のものならん地球が大陽の周圍を運ると云ふ位の事は知らざるを得ざるも別に星學として學ぶ程の入用もなし幾何代數の如きは嫁入すれば直ちに

忘るべし政治上の事など熱心になり主人が夕暮に疲れて外より歸り來るや否や女房に政治上の話を聞くは余り有がたくは思ふまじ……基督教は女子教育に必要なりと云ふ人あれども宗教は今日の世態に教育に關係なし孟子の母もコルネリヤ（羅馬の賢女）も基督教徒に非ず……

吾人一と度びは抱腹絶倒し、又一と度びは本邦民の爲に歎ず、同胞願わくは外人の巧言に迷はさるゝ勿れ。　嗚呼ベルッ君よ、吾人が日本の婦人に對する希望は必らずしも君が愛作する所ろの日本婦人の如くせんと思ふに非ず、更に一層の高き理想ある也、君もし日本食を食ひて後ち日本食を主張し、日本婦人を優待して後に日本婦人の教育を主張し、又少しは獨逸大家の教育論にても批評して後ちに君が自説を主張せらるゝあらば可也、日本には今ますでに多少の學者ある也。

○少なくとも同伴せよ

避暑は必らずしも暑を避くるに非ず、寧ろ年中の塵埃を洗滌する也、濁氣十丈の都門を出でゝ綠野千里の山村に入り、囂々たる擊殺の騷がしきを後にして雞犬遙かに和するの聖地に向ふ、即はち年中の安息日にして氣を清め大に養ふの時也。左れば避暑の効能は情思を轉ぜしむるの變化あるによる、故に平素尤も變化なきの人此際に於て尤も多く此の清き變化を受るを至當とす、果して然らば男子よりも女子、貴人よりも細君こそ先づ此時に於て外遊すべき筈也、彼等は一年中家内に閉込められたり、切めて此の土用の時丈けでも外に出でしめたきものならずや、故に寧ろ男子は留守番して大川の水にてもアビル可し、女性の方こそ先づ第一に出づべきなれ、然れども若し丈夫なる男子にして尙ほ逆も京地に留まりがたしと云はゞ、則はち少なくとも女性を同伴して避暑すべし。

○君何んぞ怒らざる

女學子居常切滋せず、人と逆らふことなく、未だ嘗て友人と爭ふことあらず、友人一日之を激せしめんとして大に罵る、女學子遂に冷々たり、傍人あり曰く女學子何んぞ怒ることの稀れなるやと、女學子則はち笑ふて曰く、君吾れを以て怒ることなしと云ふ乎、吾れは思へらく斯く怒りつゞけては心体安きを得じと、然るに之にても尙ほ不足なりとする乎。

○山林は甚はだ公平あり

われ等數日都外十里の山林に入る、樹木森立、白光地に満く、蹲踞して樹根に倚座すれば、冷風清く來り、四面靜なし、顧みて同伴者と一笑すれば、エデンの樂園の如し、未だ罪に陷いらずして智慧なき也、山林ひとり吾等を蔽ひ、吾等を護り、吾等の祈禱する所を聽く。

○婦人矯風會

婦人矯風會々頭矢島かぢ氏病によりて職を辭し、會員等再三之に強ひ、數ヶ月猶豫したるのち、遂に不得止副會頭を選擧するに至りしとは既に本誌第百六十七號に於て報道したり。副會頭に推選せられたる淺井柞女史は兼て長榮女學校を總督し且つ婦人矯風雜誌を編輯せらるゝにより、斯く多務を獨擔する能はずとて暫らく決答を延引せられたるが、此度び愈よ副會頭の任を諾けられたり、而して編輯事務は副會頭當選票數の次點者たる德富久夫人に讓られたるに、更に同夫人の推撰により金谷船氏夫人鍈子之を擔當せらるゝとなれり、淺井女史に關しては吾人既に屢ば記載したり、金谷夫人の篤信謙貞にして且つ綿密親切なる、婦人矯風雜誌は之よりして更に一の周到なる才筆を得たり、吾人謹んで賀す。

○福島人物評

女學記者足下予は貴社の雜誌を愛讀するもの也又之を信用するもの也然るに其一六九號の雜報中福島人物評と題せる明治の輿論より抄錄せし一事に至りては實に其事實に相違するに驚ろき入たり某女史の事の如き誇大の報に驚ろき又某夫人の如き俗界に等しき冷評（且事實に違ふ所ろある）に至りては更に呆れたり尤も該輿論に之を評したるは一少年にして當福島の近在の小學校に從事し時あつて福島に來り聊か又聞せし所を以て杜撰にも僭越にも物知り顏に批評したるもの故事實どころか塗徹もなき間違を記したるなり……必要あらば十分事實の報告可差上候……

之れ彼の四卷かい子の事か、同女史が米國に留學したる神學校の卒業生と稱してノンチン會に宗教改革を宣言せらるゝとに付ては、吾人も屢來與多の報道に接したり、故に前記する福島町在のS. C. Tatom氏に請ふ、若し更に十分の事實を惠報せられんには啻に吾人のみの幸わいにあらず。

○改革事業と儉素の風習

儉素の風尤も重んずべし、特に改革的の事業を爲すものは儉素ならずんば決して成就する能わじ、彼は世に於て尤も贊成家少なきもの也、贊成家少なきが故に改革を宣言す、富人は世に安んじて改革を好まず、故に改革家は就中富人の贊成を受るを得ざるもの也、左れば彼れ儉素にあらずして安んぞ其事業を成就するを得ん。　此頃ろ婦人矯風會雜誌第十六號に見ゆる、一夫一婦の建白に關する諸費精算報告を見るに實に左の如し、

十圓十三錢二厘　　佐了法以下十四名寄附
十二圓三十八錢五厘　　本會南部貯蓄金中出金

計二十二圓五十一錢七厘

四圓十九錢	建白書費	七圓九十三錢	演說會費
五圓八十九錢	印刷物費	四圓五十錢七厘	通信及雜費

計二十二圓五十一錢七厘

嗚呼二十餘圓にして全國を動かすを得るにあらずや、吾人金なきもの決して失望す可らず。

○日本改革者園てる孃

さ題して、去六月十三日のユニヲン、シグナル雜誌に米國サンフランシスコ婦人禁酒會頭カルバー夫人が記載せられたるものを見るに、孃は日本上流の人の子にして、父は醫師たり、身らは代言を業としたるが、本邦に在る間だ宣教師等の景況によりて略ぼ米國の情實を推知し、五年前即はち千八百八十五年十二月斷乎獨行して彼國桑港に渡り、先づ支那日本美以美傳道會社に行き、宣教師マスター氏の保護を受けたるが、其后美山貫一氏の勸めに從がひ、或る家族の仲働らきさなりて専ぱら英語を學び、刻苦して三ヶ月内に第一第二讀本を讀了したり、然るに此頃ろ孃が多少の金を預置たる日本國の某銀行破産したりしかば、兼ての預算俄かに相違し、非常の辛苦を爲したりしに、キーチー夫人と云へる人の信切によりて其家に同居し、只管ら學を勉め、又基督教の道に感じて大に改悟し、宣教師ハリス氏によりて受洗したり。之よりして孃が志望瞬然一變し、眞正の改革は只傳道にありと確認して大ひなる熱心を以て道を傳ゆるとに決念し、一意教理を研究し、又有志者と計りて桑港に婦人禁酒會を起し、或は同志者より一百弗を集めて桑港日本人の救助會を設けたり、而して此頃ろ遂に其願を得、シカゴ府のヂヤコブス校(傳道女學校)に入校したり、出發する砌り、桑港在留の學生一百余名集りて靜肅なる送別會を開きたりしに、孃は熱信なる勸話を述べて大ひに聽衆を感動せしめたり、云々と。

片々

○御歌の事　皇后陛下には一日に御歌七首づゝ日課として御詠遊ばさるゝ由に承はる。

○男女婚姻年齡取調委員　左の諸氏は今度本邦男女婚姻取調委員を命ぜられたり

醫科大學教授醫學博士	三宅秀
醫科大學教授醫學博士	大澤謙二
醫科大學教授醫學博士	緒方正規
醫科大學教授	三浦守治
醫科大學教授	濱田玄達
醫科大學教授	片山國嘉

○離婚に就ての取調　司法省にては去廿日より當市各區所に吏員を出張させ(一)夫婦離婚の場合に於て婚姻中に擧たる子を夫の家に遺きて生家に復籍したる婦の員數(二)又其子を携帶して生家に復籍したる婦の員數(三)寡婦子又は入夫さなりたる者離婚の場合に於て婚姻中に擧げたる子を其の家に遺きて生家に復籍したる者の員數(四)又其子を携帶して生家に復籍したる者の員數、右四件を三ヶ年間の統計にて取調べ居る由。

○產婆取締規則　目下產婆社會の有樣を見るに其仲間兩派に分れ一派へ內務省に於て卒業免狀を得しもの一派は舊取揚げと唱ふる老婆にして中には熟練のものも無きに非ざれども概ね正當なる產婆の本業を知らざるも多かりしが風俗習慣に依て之を禁絕し難き事情あるにより其筋に於ても今日まで默々に付し遣きたる姿にて已むを得ず府廳より是等の產婆には假免狀を下附ありし位の次第なれば之れが爲め往々人命を誤まる等の盡少なしとせざる故に此際一層此規則を嚴格に爲し弊害を匡正せんと目下其筋にて評議を凝らし居るとの由なるが左もあるべきことなり(廿一日政論)。

○本國より女教師を聘す　本邦駐剳の米國公使スウ井フト氏は夫人の令妹子女二人を教育する爲め同國婦人にして教育に經驗あるものを聘し是等の子女に完全なる教育を爲さしめんとせしも我國在留の同國婦人中には適宜の人なきに依り過般態々本國へ申送りてメーリニ女史を聘し女史は此程渡來せりと云ふ。

○產婆合計　今度其筋に於て府下十五區六郡の產婆を取調られしに總計五百廿五人にして內務省より本免狀を受けし者百二十六人東京府より假免狀を受けたる者三百九十九人なりと。

○女學校生徒の遠足運動　山梨縣の女子師範校生徒一同は本月廿一日より躰力養成の爲め京都へ遠足する由なるが女生徒の長途旅行とは近ごろ珍らしきとなり。

外報

○ラムバイの學校　印度に歸りしのちボムベイに設けたる同學校にはシヤルダ、サダムと云へる名を附けたるよし其義はザ、ホーム、オフ、ランニング と云へるとにて學舍と云へるに當る也。

○內親王の婚儀　フハイフ伯及ウィルス內親王の婚儀は二十七日に行はるべし又女皇陛下より內親王の爲めに行ふべき準備に關し下問ありスミッス氏は下院に於て同伴を調査し且何等の主義を將來之と同樣なる場合の處置に用ゆべきかを報告せん爲め委員を選まんとの動議を提出せり(倫敦電報)。

廣告

巖本善治編 女學叢書 **木村鐙子小傳** 實價拾錢 郵稅六錢

右は鐙子刀自の傳記にて姉妹方の必ず閲讀せらるべき價値あるものなり

船越鼎太郎君著 産婦小兒 **攝生法** 一冊十八錢郵稅四錢

右は産婦小兒の養生法を平易なる文章にて何方にも分り易き樣認めたる者なれども所論は一々學理に照して實際を鑑み專ら當今の養生法其道を盡さゞるとを教へたり故に月經の心得より、妊娠したるか否やを知ると、出産の期日を知る法、妊娠中の養生法、産後の養生法赤子のとりあつかひ、乳を飲まするの間養生法、母の乳を用ひずして子供を育つる法等ことごとく信切に教へたり世の母たらん人は何卒一冊を座右に備きて最愛の生子を誤りて取扱ひ玉ふやうのとなからとを希ふ

發兌 東京京橋區日吉町八番地 **女學雜誌社**

教育時論第百五十三號目次 明治廿二年七月十五日刊行

肖像●ダブリユ、チハリス氏
社說●●教育制度私議
教育●小說と學生(塵外散士)●尋常師範學校寄宿舍監督改正私議(格堂生稿)
哲學●近世史綱(薮村居士纂譯)
理科●日本食鹽(岡本常次郎稿)
文藝●唱歌●松島に遊ぶ日記(遠藤信道)
内外雜纂●話の種外十數件●廣告十數件

本誌一部正價五錢郵稅一錢見本に限り郵劵代用不苦

發行所 東京神田區柳原河岸十四號地 **開發社**

交詢案內

(催促する勿れ 郵劵十錢送れ 委細に申來れ)

●雇ひたき方(甲)

十二	下婢	年齡廿歲より五十歲迄の基督信者を雇入度者あり
十五	召使	家内の手助けとなり小兒の世話をなすべき年少女子を雇ひたし尤も裁縫等を學びたき志あるものを望む
十六	召使	市に小供の世話及裁縫等にして家事の手助けとなるべき年少の女子を雇ひたき所あり但官員の御内なり
二〇	取締	基督教信徒にて年齡三十才四十才なる獨身の婦人にして女學校ヶ寄宿し寄宿生徒の世話を爲し得る者を雇入れ度處あり但し算筆並に日本裁縫に心得ある者
二一	中働	年齡廿五才にして一ト通り裁縫の出來るものを一圓以上の給金にて雇ひ度處あり

●雇はれたき方(乙)

六	奉公	地方師範學校卒業生にて學費に困むに就ては可成西洋人宅にて兼て協力勉學旁雇へれたき二娘あり無給にて何地にてもよろし
七	裁縫	年齡廿三にして家内の手助けとならんが爲め内職に裁縫に雇へれ度き者あり華族樣か町家ならば大家のかたき内にて築地邊ならば通いても宜しとのと其他ハンケチーフのふち縫の如きにても宜し
十三	教師	栃木縣女子師範學校の卒業生にて何處かの學校或は他の御内にても教授に雇はれたきものあり可成くは麹町か駿河台邊を望む
一九	召使	裁縫の教授を專にし其他女子學校等監督兼留守居樣の者に雇れたし
二四	奉公	年齡廿二才にして一と通り裁縫もいたし氣輕の生れつきにて華族樣か中以上の官員方へ中働きに奉公いたし度し給金は壹圓以上に願ひたし
二五	裁縫	裁縫は重もに婦人洋服にて和服にも巧なり學校若しくは華族其他高貴の御内に教師に雇はれたし
二八	奉公	普通小學科卒業の者にて(年齡二十二才)産婆業を營まるゝ基督信徒の家に無給にて雇はれ余暇に産婆術を學び度ものあり
二九	奉公	年齡十四歲にて基督教信徒の家(可成は西洋人)に雇はれ度ものあり尤も普通食料小使仕着等一切持參致すに付き毎日四五時間英語學の修業致したし
三〇	通辨	年齡廿四歲にて貴婦人方の英語の通辨として雇はれ度ものあり
三一	奉公	廿一二才のキリスト信者にて裁縫を教へ家内の手助けをなし四時間通學を爲し得る家に無給にて雇はれたきものあり
三二	奉公	年齡十二才にてキリスト信者の家に小間使又は兒守りに雇はれ度者あり夜分には夜學校等にて教授を受け候と出來候はゞ給料は申受けず
三三	裁縫	年齡三十六才にて裁縫の教師又は裁縫致し候處に雇はれたく但し先方に止宿を願たし

Digitized by Google Original from COLUMBIA UNIVERSITY

女生徒募集公告

本校ハ九月十六日始業豫科一年生ヨリ各級入學ヲ許ス志願者ハ入舍學共九月十日迄ニ申込ベシ十二日ヨリ三日間入學試驗ヲ執行規則書ハ郵券二錢ニテ送付ス

明治二十二年七月

京都市今出川通寺町西入

同志社女學校

生徒募集廣告

一今般高等科前期普通科前期後期男女子共臨時募集候條志願者八月廿五日限願書差出ス可シ

但兩校規則ヲ望ム者ハ郵券四錢ヲ要ス

一從前之通リ兩校ノ學科兼修スルヲ得可シ

本郷區駒込追分町

私立**東京唱歌專門學校**

六合雜誌

第百三號目錄　明治二十二年七月廿日發行

◎敎育哲學原理一班……和田垣謙三
◎聖書のインスピレーション……小崎弘道
◎眞理の自由考究……山田寅之助
◎奇跡の奇跡……ダブリユー、ジブレイキー
◎社會の良心……山中百
●雜記○基督敎と青年○中島力造氏の著書○ユニテリヤン敎大會に於けるナップ氏の演說○大圓眞理○證詞の百合花○廣告○定價一册八錢○半年年分(六册)四十三錢○一年分(十二册)八十錢

發行所　京橋區加賀町十一番地　**警醒社**

發兌				
七月。	六日	十三日	二十日	廿七日
八月。	三日	十日	十七日	廿四日	卅一日
九月。	七日	十四日	廿一日	廿八日
十月。	五日	十二日	十九日	廿六日

定價			
一册。六錢	郵稅。一錢	(但府內無郵稅)	
十册。五十八錢	郵稅。十錢	(同前)	
半年分	一圓四十三錢	府外は	一圓六十九錢
一年分	二圓六十錢	府外は	三圓十二錢

廣告

一行　一回　前金拾錢
同　三回以上　一割引
同　六回以上　二割引
(廿七字詰)

十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道徳なる事物の廣告は謝絶す有益なる事物の廣告は社議の上無代價にて引受く女學關係の書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし

特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を掲ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を要する毎に右雜誌十部の注文を要し以上半頁分毎に十部增の割合と定む

WOMAN'S MAGAZINE.

"JOGAKU ZASSHI."

Price 6 *sen*. By post *yen* 1.69 six months, *yen* 3.12 per annum, in advance.

Edited and Published by Y. H. Iwamoto, at The Jogaku Zasshi Office, No. 8B HIYOSHICHŌ, Kyobashiku, Tôkyô, Japan.

女學雜誌賣捌所

東京京橋區彌左衛門町殿々堂○同芝西久保櫻川町萬春堂○同神田區雉子町團々社亥店○同神田區佐柄木町東海堂○同日本橋區新葭町眞明堂○同京橋區木挽町壹丁目萬字堂○同本郷區元富士町盛春堂○同本郷區春木町二丁目解明堂○同本郷四丁目文泰堂○横濱住吉町角田屋貞○同太田町三丁目萬字堂○同日月堂○同本町六丁目日の出屋○京都四條通小橋西へ入澤集光堂○同三條通東洞院西へ入クリスチアンボード○大坂備後町四丁目岡島支店○仙臺國分町十五番地伊勢安雜誌部○宮城縣仙臺大町木村文助○尾張國名古屋本町石版社○出雲國松江新町盛進堂○廣島縣大手町一丁目早速社○長崎酒屋町虎與號○江州彦根西内大工町新々堂○相州小田原綠町石壽堂○上州高崎田町煥乎堂○土佐國高知本町三丁目樂園堂○熊本文明堂

明治二十二年七月廿五日印刷
明治二十二年七月廿七日出版

東京京橋區日吉町八番地
發行所　**女學雜誌社**

東京京橋區日吉町八番地寄留
編輯兼發行者　嚴本善治

東京芝區源助町十一番地寄留
印刷者　森田豐

遞信省認可

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY